

多地点サイバー交流授業（世界の英語たちとその誤解の原因）～ オンデマンド授業と反転授業の試み

中野 美知子¹ 近藤 悠介² 中澤 真³ 小泉 大城⁴

早稲田大学教育・総合科学学術院¹ 早稲田大学・オープン教育センター²

会津大学短期大学部³ サイバー大学・IT 総合学部⁴

1.0 はじめに

世界の英語たちとその誤解の原因 (World Englishes and Miscommunications) と題されるサイバー演習コースでは、世界の多様な英語をオンデマンド授業で学び、半期 5 回の多地点のサイバー交流授業との組み合わせているコースである。オンデマンド講義は、原則、予習をし、授業中は質疑や補足説明を英語で行っている反転授業の形態をとっている。サイバー授業では参加学生たちがパワーポイントで発表し、英語による討論をする。扱っている英語は、インド英語、シンガポール英語、マレー英語、フィリッピン英語、香港英語、マカオ英語、イラク英語、韓国英語、中国英語、台湾英語、日本英語で、その国を代表する社会言語学者が、各国の英語について、地理歴史的な特徴、発音、文法、語彙、特異な慣用句などを紹介している。理論的な背景として、Kachru のモデル、Smith の English as an International Language (EIL)、Seidlehofer や Jenkins の English as a Lingua Franca (ELF)、Kirkpatrick の “Successful Bilinguals” の考え方、外国語としての英語話者の Identity の問題、バイリンガリズムの問題などが紹介され、すべてオンデマンド講義になっている。多地点サイバー交流にはアジアの 14 大学が参加しているので、2 組に分けて、2 回開講している。参加大学は、シンガポール国立大学、ナンヤン工科大学、香港バプティスト大学、

マラヤ大学、デ・ラサール大学、復旦大学、マカオ学、武漢大学、淡江大学、ウェンザオ大学、高麗大学、韓南大学、ナムソウル大学、早稲田大学となっている。この演習科目は 2002 年と 2003 年に大学院生を対象に実験的に開講され、2004 年からは学部生と大学院生の共通科目として本格的にオープン科目として開講された。現在では、学部生のグローバルリテラシーを高める科目として注目を浴びている。次のセクションではまず理論的な背景を概観し、授業の概観を述べるとともに、反転授業の側面を解説する。

2.0 理論的な背景

このコースでは、理論的な背景として、Smith の English as an International Language (EIL)、Kachru の World Englishes、Seidlehofer や Jenkins の English as a Lingua Franca (ELF)、Kirkpatrick の “Successful Bilinguals” の考え方、外国語としての英語話者の Identity の問題、バイリンガリズムの問題などが紹介され、すべてオンデマンド講義になっている。

2.1 English as an International Language

ハワイ大学・マノア校の East West Center に 70 年代に勤務していた Larry Smith 教授が当時アジアからの教員に教員研修を行っていた。アメリカ人の Smith 氏の英語はアジア人教員に通じないこともあったが、アジア人同士ではお互いの訛りのある英語が立派に通用していたことに気付いた。英語を母語とするアメリカ人の米語、イギリス人の英語、カナダ人の英語の他に、Smith 氏は英語母語話者の英語の他に、国際語としての英語の存在を提唱した。これが English as an International Language である。国際語として成立するための要件として Intelligibility, Comprehensibility と Interpretability という指標も提案した。しかし、現在でも国際語としての英語が具体的にど

Multi-Point Distance Learning Interactive Seminars (World Englishes and Miscommunications) – A Practice of Flipped Classrooms using On-demand Lectures.

¹Michiko Nakano, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University

²Yusukekondo, Open Education Center, Waseda University

³Makoto Nakazawa, Junior College, Aizu University.

⁴Daiki Koizumi, Faculty of Information Technology and Business, Cyber University

のようなものはわからず、Vienna-Oxford International Corpus of English (VOICE) や Asian Corpus of Englishes (ACE) などの口語英語のコーパスを解析し、科学的な同定への努力がなされている。

2.2 World Englishes

1980年代から提案され、1990年代以降、研究者の中で受け入れられてきた考え方として、Kachru の World Englishes がこのコースでは紹介されている。Kachru は、世界の英語たち (World Englishes) を、産業革命以後の英国の植民地政策と移民政策と関連づけ分類すると同時に、英語の伝播の歴史を3つの同心円で説明しようとした。英国人が移住した国々を内心円、植民地政策により英語が公用語になった国々を外心円、グローバル化で英語を使用した国々を拡大円で表現した。このモデルの長所は歴史的な英語の伝播を捉えていること、内心円の英語は Native Speaker Englishes であり、外心円の英語は英語を第2言語とする (ESL) の国々であり、拡大円の国々では、英語は外国語 (EFL) である事実と一致している。また、内心円が英語母語話者の英語が規範になっていること (norm-providing)、外心円に属する国での英語は母語話者の規範から独立した特色が200年の英語使用で発達してきていること (norm-independent)、また、拡大円では英語母語話者の規範に忠実に教えようという姿勢 (norm-dependent) がみられることなど、3つの同心円の Kachru のモデルはこれらの特徴を捉えていると言える。植民地からの独立は英語使用の独立ともいえ、訛りのある外心円の英語たちに主体性 (identity) をもたせた理論となっている。

2.3 English as a Lingua Franca (ELF)

1990年の後半から2000年代には、欧州共同体でも、英語が共通語としてつかわれ、アジア地域の拡大円の国々でも英語が共通語になりつつある。殊に、ASEAN では英語は Working Language として認められてきた。英語が世界語として使用されつつある現在、Seidhofer や Jenkins は English as a Lingua Franca (ELF) としてみられるべきであると提唱した。Seidhofer は英語母語話者の文法とは異なる単純化された文法と用法を ELF lexico-grammar としてまとめた。Jenkins は非母語話者は母語話者のレベルの発音や韻律をマスターすることは至難の業であるので、ELF Core として、最低限守るべき発音と音韻ルールを提案した。

2.4 Successful Bilinguals

一方、Kirkpatrick はアジア人の特徴は英語の他に母語があり、2カ国語話者が圧倒的であることに着目し、英語自体は母語話者になれないものの、バイリンガルとして、立派に通用する英語と母語を大切に維持していくべきだと提案した。2010年からこの提案は注目されており、たとえば、日本人の英語力の目標は母語話者に近くなるのではなく、バイリンガルとして成功している日本人教師の英語レベルを教育目標とすべきだという考え方である。

3.0 オンデマンド授業を多用した反転授業

発表ではオンデマンド授業の主なものをまとめて紹介する。補助資料も豊富で、各英語異種の違いを理解するための発音学、統語用語、クレオール用語、音韻論、語用論の違いの説明、口語英語の非流暢性の理解のための PPT 資料が用意されている。受講生はオンデマンド授業を受講し、BBS やメールで質問をしてくる。オンデマンド授業を理解したうえで、受講生なりのまとめと審議ポイントを PPT で授業中に発表する。授業中はディスカッション中心の授業となる。これは反転授業といえるものであるが、2002年の実験段階からこの授業形態は踏襲されているので、反転授業の先駆的な試みであると言える。

4.0 まとめ

この授業では、世界の多様な英語をオンデマンド授業で参加学生が学び、多地点サイバー交流授業では英語で発表・討論をする。インド英語、シンガポール英語、マレー英語、フィリピン英語、香港英語、マカオ英語、イラク英語、韓国英語、中国英語、台湾英語、日本英語を扱い、各国の社会言語学者が、地理歴史的な特徴、発音、文法、語彙、特異な慣用句を論じる。参加大学は、アジア地域の14大学で、このサイバー交流演習の概観と反転授業の側面を発表する。

参考文献

- Kachru, B. B. (1992). *The other tongue English accross cultures*. 2nd edition. Illinois: University of Illinois Press.
- Kirkpatrick, A. (2010). *English as a Lingua Franca in ASEAN: A Multilingual Model*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Jenkins, J. (2000). *The Phonology of English as an international language*. OUP.
- Nakano, M. (2007). *On-Demand Internet Course Book: World Englishes and Miscommunications*. Waseda University International.
- Smith, L. E. (1976). English as an International Auxiliary Language. *RELC Journal*. 38-42.